

The Record by an Old Guy in the world of Virtual Reality Massively Multiplayer Online

# とあるおっさんの VRMMO活動記



椎名ほわほわ

Shiina Howahowa

# 17

## 登場人物紹介

### リビングアーマー

四天王の一人。  
鎧の中身は空洞で、  
どこから声が出るのか  
魔王様も知らない。

### 魔王様

魔族の頂点に立つ存在。  
とてつもない力を誇る一方で、  
意外な一面も……？

### ヘテラ

魔王様に仕える  
四天王の一人。  
サキュバスクイーン  
ながら肌を見せない。

### アクア

妖精国の象徴・  
ピカーシャの一体。  
お忍びでアースの旅に  
同行する。

### デス

四天王の一人。  
死神であって  
魔族ではないが、  
魔王様に  
協力している。

### マドリア

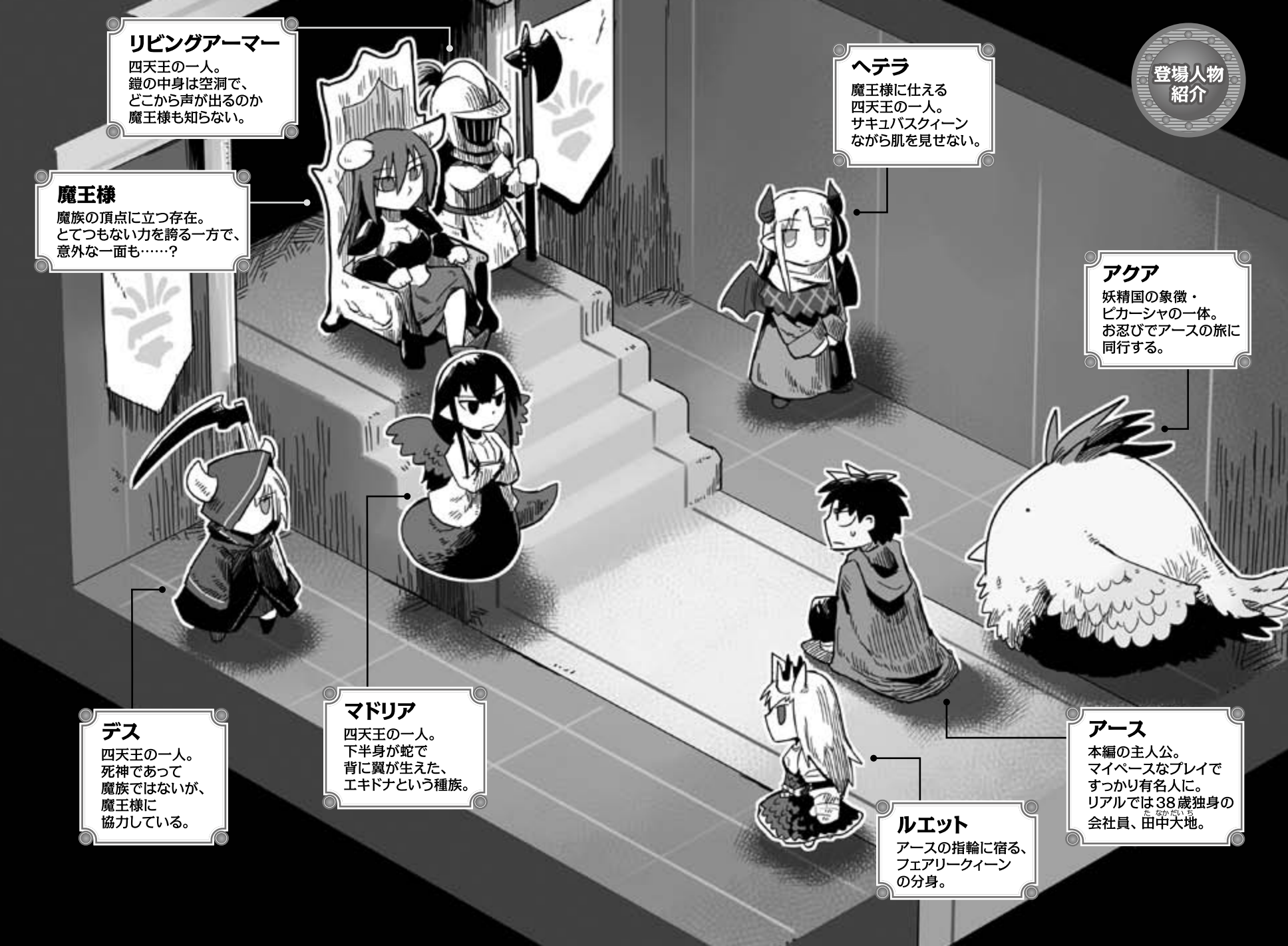
四天王の一人。  
下半身が蛇で  
背に翼が生えた、  
エキドナという種族。

### ルエット

アースの指輪に宿る、  
フェアリークイーン  
の分身。

### アース

本編の主人公。  
マイペースなプレイで  
すっかり有名人に。  
リアルでは38歳独身の  
会社員、田中大地。  
たなか だいち



長いメンテナンス期間が終わり、いよいよ魔王領が開放された。

まあ、長いと言っても、自分の場合は仕事から帰って細々とした家事を済ませたときには終わっていたので、待ち時間はゼロだったのだが。

早速自分は「アース」として「ワンモア・フリーライフ・オンライン」の世界にログインし、フォルカウスの街の北門から魔王領に向かって出発する。

今日の予定は、まず魔王領に入るまでは、他の人たちと一緒に徒歩で移動。そして国境での入国審査を通ったら、即座にアクアに本来の大きさに戻ってもらい、魔王城に直行する。ダークエルフの守護者である閼様から受けた今回の依頼は急を要するため、あまり目立ちたくないなどと言っている場合ではない。

フォルカウスから魔王領の国境までは、徒歩で大体二〇分ほど。アップデート初日のお約束で、大勢の人が魔王領に向かうために、モンスターたちも近寄ってこない。襲い掛かってきても、数の

暴力で瞬殺されるだけだと分かっているのだろうか。

妖精国が実装された頃はお構いなしに襲い掛かってきたもんだが、あれからAIの強化が何度も入っているからな。モンスター側の思考もバージョンアップしたと考えるのが自然だろう。

そんなこんなで、国境に来るまでこれと言った問題はなし。そして入国も問題なし。ただ、入国時に以前レンタルした例の耐寒ペンダントに対して、何らかのチェックが入っていたようだが……こつちもあれを使つて何か悪事を働くわけでもなし、気にする必要はないか。

入国許可を得ていよいよ魔王領に足を踏み入れた自分だが、その直後にぶるりと身を震わせた。

寒い。国境を跨いでから歩いた距離は、直線にして一キロもない。にもかかわらず、確実に体感温度が大きく下がっている……と感じていたところ、耐寒ペンダントが淡い光を放ち始めた。と同時に、寒さは一気に消え去った。

(どうやら、ペンダントは問題なく効果を發揮してくれたようだ。さて、肝心のMP消費量はどんなものか)

ちらりとMPバーに目をやるが……ほぼ変化なし。間違ひなく減つてはいるのだが、自然回復量で十分賄えるぐらいの、非常にゆつくりした減少速度なのだ。これならMPを極端に浪費しない限りは、ポーションなどを使わなくても大丈夫そうだ。

さて、肝心なことも分かったし、急ぐとするか。

「アクア、お願い」

「びゅい」

ちび状態のときの定位置である自分の頭上から飛び降りたアクアは、本来の体軀に戻る。当然その状況は周囲の人にももろに見えているので、あちこちから「あれ、ピカーシャじゃん!」とか「妖精国のシンボルがなぜこんな場所まで出向いてきたのだ!」とかの声が聞こえてくる。しかし、今はその言葉に付き合うつもりはないので、全部無視してアクアの背中に乗る。

目的地は魔王城、実装初日だが、一気に乗り込ませていただく。

「アクア、GO!」

「びゅい!!」

自分の指示に、アクアは久々に鳴き声を高く張り上げて、空へと飛び立つ。周囲のざわめきがあつという間に聞こえなくなった。今は風の音と、ルエットの声だけだ。

「やつと託された依頼をこなせるわね。この前人魚の里に現れた赤鯨のような化け物がまた生み出されちゃシャレにならないし、急ぎましょう」

ルエットは休息を終え、また指輪から実体化できるようになったらしい。もちろん、今は省エネのちび状態だが、オリジナルであるフェアリークインとは完全に別の存在になったようで、その姿は元々のドレス姿から完全に脱却し、赤鯨戦で見せた鎧姿だ。そこまで姿が変わったきっかけは、

名前が付いたことなんだろうな。

「ルエツトの言う通り、これ以上放置しておけばとんでもないバケモノが生み出されてしまうかもしれない。アクア、雪の中辛いかもしれないが、頼むぞ！」

「ぴゅい！」

アクアが全力で飛んでくれたおかげで、国境から魔王城の前に到着するまでに三〇分かからずに着いた。

だが、その魔王城前では、大勢の魔族の兵士が警戒態勢で待ち受けていた……無理もないか。国境を越えたと思ったら突如魔王城方面に全力で飛んでいったんだ、魔王様によからぬことをしに来たと思われたとしても文句は言えないな。

ひとまず、アクアには魔王城から少し離れた場所に降りてもらい、また小さくなくてもらって自分の頭の上に乗ってもらう。それから自分は、魔王城に向かってゆつくりと歩を進めた。走ったりしたら要らぬ刺激を与えてしまう。

「そこで止まれ！ 貴殿は先程、魔王領に入国したものだ？ ここは魔王様がおわす城、観光目的で来る場所ではない！ 用がないのであれば早々に立ち去られよ！」

待ち受けていた魔族たちの中から一人の女性魔族が進み出て、そう警告を飛ばしてきた。その警告には、かなりの威圧感が込められている。しかし、それにしり込みするわけにはいかない。

「私は冒険者をやっているアースと申します！ 今日ここに姿を現したのは、一つのお願いと、一つの依頼を達成するために、魔王様への謁見を願うためです。争う意思はございません！ どうかお聞き届けを！」

フードを被<sup>かぶ</sup>って顔を隠したままの女性魔族に、自分はそう答える。

さて、何としても魔王様と対面しないと、話が進まない。どうやってこの女性魔族を説得しようかと考えていると……話は意外な方向に転がった。

「え？ アース？ ——一つ確認します。貴方は以前、ゲヘナクロスとの戦いに参戦しましたか？ もし参戦していたのであれば、そのとき移動に使った馬車の中にいた、人族以外の種族を答えなさい」

へ？ また懐かしい話を……えーっと、あれは妖精国に入った直後だったか？ 確かに自分は馬車に揺られて南の街に向かった。で、一緒に乗り合わせたいろんな種族のひと、雑談したな……そうそう、それぞれが義勇兵になった理由を話したんだっけ。

「えーっと、あのときは……龍族、獣人……兎耳の人だったかな？ それから魔族の女性だったと記憶しています。その魔族の方に、魔王様に会ってみたいと考えていたことを見抜かれたりもしましたね。それを獣人さんから呆れられたように記憶しています」

記憶があいまいになってきているが、これくらいはまだ何とか覚えていた。それというのも、そ

の女性魔族とのやりとりのおかげだ。だが、彼女の名前はすばーんと忘れてしまっている。

「——そう、本当に来てしまったのね。大した行動力と言えいいのか、頭のネジが飛んでいると言えいいのか。とはいえ、全く見知らぬ人物というわけではないわね……」

先程までの威圧感が消え失せ、思案する素振りの女性魔族。まさか、な。

そんなことを考えていると、女性魔族がフードを脱いだ。その顔には見覚えが……あるようないなような。

「一応顔を確認したので、貴方もフードを取ってもらえるかしら」

ここで逆らう意味はないので、先にドラゴンスケイルヘルムを解除してからフードを脱ぐ。そうして曝された自分の顔を、じっくりと確認する魔族の女性。こうじろじろ見られると、恥ずかしいんですがね。

「間違いないわね。あのとき同じ馬車で揺られて共に戦場に向かった戦友との再会か……何とも妙な形になったものね。まずは、お互いあの戦場を生き抜いたことを喜ぶべきなのかしら？」

まだ記憶はあやふやだが、自分の顔を知られている女性魔族で思い当たるのは、例の馬車で一緒になった人しかないいな。

ここまで来ると、馬車の中で交わした言葉も鮮明に思い出される。そうだ、魔族の女性は、魔王様にゲヘナクロスの殲滅を命じられたと言っていた。それから外套で体を被っていた理由は、肌の

色と角を見られると怯えられるから、と。

そして目の前にいる魔族の女性の角と、記憶の中の角の形が、完全に一致した。

「そうか……貴女もあの戦場を生き延びていたんですね……本当にお久しぶりです。あの戦いでは辛いことが多くありました。できることなら思い出話に花を咲かせたいところですが、今はどうしても魔王様に直接、できる限り早くお会いせねばならない用事があるのです。何とかならないでしょうか？」

自分の言葉に悩む魔族の女性。名前はまだ思い出せない。

「お会いしたいのであれば、時間をかけて身辺調査を受けた上で……というのが普通ですが。どうしても早急に魔王様に会わなければいけない重要な用事なのですね？」

念押しという言葉に、自分はゆっくりと、しかししっかりと頷く。アクアが落とされまいとして頭に爪を立ててきたので、少し痛かった。

「ならば、魔王様の配下である四天王の皆様にお会いして、全員の許可を頂くほかありません。四天王様のお一人おひとりが出される試験を全てパスすることが、魔王様に謁見する最短の道となります。しかし、挑戦できるのは一度だけ。そしてその試験の結果によっては、生きて魔王城を出ることはできないでしょう。それでも構いませんか？」

いるのか、四天王。ある意味お約束といえはお約束ではあるのだが。とはいえ、どんな条件で

あつても断る選択肢はない。時間をかければかけるだけ、状況が悪化することは目に見えている。

赤鯨を最後に、まだ次の存在は確認されていない、赤いオーラを纏うモンスター。しかし、それは裏返せば、魔王領のどこかにある暴走状態の魔力が、赤鯨以上の強さを持つモンスターを生むために力を蓄えている真つ最中だからとも推察できる。

「構いません。その試験、受けさせていただきます」

こうして自分は、魔王城の中に足を踏み入れることになった。

さて、四天王とはどのような方々なのやら。闇様からも絶対に争ってはいけないと事前に念押しされているから、戦ってはいけないことだけははっきりしているが……どう立ち回ったものかな。

「では、こちらへどうぞ」

案内に従い、魔王城の中へ。そこでつい、自分はこう呟いてしまった。

「これは……凄いですね」

見た目的には、そう派手というわけではない。だが、荘厳というか圧倒されるというか。とにかく一国の王が住まう場所としての威厳を、城の中にある物全てが醸し出しているのである。

「魔王様は大げさな設いをあまり好まれないのですが、やはり王の住まう場所には、それ相応の物

が必要ですから。さて、ここから先の案内は別の者が行います。やってきたようですね」

自分の口から漏れた感想が聞こえたらしく、魔族の女性はそう説明してくれた。

さて、彼女の視線の先を見ると、奥から女性用のフルプレートと、メイド服が数人歩いてきた。

——お前は何を言っているんだ？と思われそうだが、自分は何も間違ったことは言っていない。本当に、鎧とメイド服そのものが歩いてきているのである。透明人間なのか？魔王様の配下にそういう種族がいてもおかしくはないけれど。

「お疲れ様です、ここからの案内役は私たちが引き継ぎます。貴女は元の任務に戻ってください。外に控えさせた兵士たちにも、通常任務に戻るようにと指示を出してくださいね」

と、女性用フルプレートがここまで案内してくれた魔族の女性に優しい声で告げる。

ここにきて自分は、この見た目に該当するモンスターを思い出していた。それは、リビンググアーマー、動く鎧だ。

しかし、鎧のほうはそれでいいとしても、メイド服のほうは？リビンググメイド？いや、そんなモンスターは知らない。

「貴方が、この度四天王の試験を受ける方ということですのでよろしいですね？ここからは私の部下であるこの子——ミステが案内を務めます。ミステ、挨拶をなさい」

リビンググアーマーがそう言うと、動くメイド服部隊の中から一人（一着？）のメイド服が進み出

て、丁寧にお辞儀<sup>じぎ</sup>をしてきた。

お辞儀だと分かったのは、頭上らしき場所にヘッドドレスが浮かんできたからである。しかし、こうやって空中に浮かんているメイド服を見ると、どうにも妙な気分になる。

「案内役を務めさせていただくミステと申します。よろしくお願いいたします」

礼には礼で返すべきだよな。アクアを頭から降ろして胸元に抱きかかえ、こちらも挨拶をすることにした。

「ご丁寧ありがとうございます。私はアースと申します。こちらこそ急なお願いを聞いていただき、申し訳ありません。よろしく願います」

普通に挨拶を返したただけだったのだが、なぜかざわめきが起こる。何かやっちゃったかな？ 所変われば意外なことがタブーになったりもするから……が、非難するような雰囲気はないから大丈夫だとは思う。

挨拶が終わったところで、ミステさんが手を差し出してきた。手袋をしているので動作が分かりやすいのが助かる。

「それでは、武器をお預かりします。ですが、四天王の皆様に対して力を示すことで魔王様との謁見に繋がたいとお考えであるならば、そのままお持ちいただいて結構です」

戦いに来たわけではないし、四天王の皆様に力を示す方法を採るつもりもないから、ここは素直

に従おうか。

「分かりました、ではお預けしますね。ただ、少々数が多いのですが、よろしいでしょうか？」

自分の問いかけにミステさんからは「問題ありません」と返ってきたので、あらゆる物を預けることにした。まずは弓と矢。次に魔剣。そして靴<sup>くつ</sup>につけている蹴りの補助武器。

「はい、では一時お預かりしま——」

「すみません、まだあるのですが」

「——す……あら？ そうなのですか？」

次はアイテムボックスの中にある【強化オイル】、本来は調理器具である包丁、木こり用の斧、鍛冶用のハンマー、いくつかの毒薬など……鎧はまあいいとして、武器に転用可能な物を根こそぎ引っ張り出す。

「ず、随分とお持ちだったんですね。はい、確かにお預かりしました。お帰りになるときに返却いたします」

ミステさんは少々引いているようだったが、まあ仕方がない。色々なスキルを取っている上に生産までやっている以上、どうしても持ち物が増えてしまうんだよね。

「では、ご案内いたします。最初の試験を担当する四天王様のお部屋はこちらでございます」

身軽になった自分は、外套のフードも外した状態でミステさんの後に続く。



その途中でちらりちらりと周囲の様子を窺うと、浮いているメイド服が掃除をしていたり、植物の世話をしていたり、物を運んでいたりと、忙しく仕事をこなしていた。

「これだけ大きいお城だと、メイドの皆様の仕事量も非常に多そうですね」

前を歩くミスエさんにそう質問すると、「ええ、かなり大変ですね」と言ってから詳しく話してくれた。

「休息時間は十分に頂けるのですが、かなり忙しいです。正直こうやって案内をしている時間は休息しているようなものです。まあ、アース様が非常に友好的かつ案内に素直に従ってくださるからそう言えるのですが。逆に戦いばかりを望まれたり、城の中から価値のある物を盗み出そうと考える不埒な方を相手にするときは非常に疲れます」

なるほどねえ。つまりこのメイドさんたちは、こまごました作業から戦闘までこなせるというわけか。まあ、魔王城に勤めるメイドさんたちが、普通のメイドさんなわけもないか——それ以前に、メイド服が宙に浮いているという時点で、ただごとじゃないけどさ。

そんな雑談を交えながら案内されること数分。いろんな場所を曲がり、階段の上り下りなどもあり、一人で帰るにはかなり迷いそうな通路を歩いて、一つの扉の前に到着した。

「さて、お待たせしました。ここにいらっしゃいます。ここから先はお一人でお進みください。それが決まりですので」

決まりならしょうがない。罠がないことを確認してから、扉の前へ。そしてノックをしようとして、手が止まる。

（あれ、ノックの回数って何回が正しかったんだっけ？）

そんなことどうでもいいだろう、とツツコミが入るかもしれないが。自分はここで考え込み始めてしまった。

（一回じゃ足りないよな。二回は確かトイレのときって誰かから聞いたような。そうすると三回でいいのかな？ 四回はくどいような気がするし）

そんな風に考えを纏め、ノックをコンコンコンと三回。それから少し後に、「入ってよいぞ」との女性の声があった。

「失礼いたします」と断って、ドアをゆっくりと開ける。そして中にいたのは、下半身が大きな蛇上半身は人ながら、その背中からは翼が生えた女の人だった。

「すまないが、ちよっとした書類の確認が終わらなくてな……せつかくやってきてくれたというのに申し訳ないが、少しだけ待ってほしい」

彼女は背中をこちらに向けたまま、そう言う。

こちらが押しかけたのだから、大人しく待つことにする。しばらく、部屋の中にはサラサラサラと筆記用具が紙の上を舞い、何かを書いていく音だけが聞こえた。

やがて、カタンという音と共に女性に筆記用具を机の上に置いて、ふうと息を吐き出す。

「こんなところか。飛び入りの仕事はやめてほしいものだが、魔王様のためならば仕方がないな。さて、大変お待たせして申し訳ない。私は魔王様に仕える四天王の一人で、エキドナのマドリアという者だ。で、貴殿は四天王の試験を受けて魔王様への謁見を願う者で間違いないか？」

なんとというか、眼鏡を掛ければ仕事ができるクールなOLみたいな感じだな。まあ四天王なんて大層な地位にいる方なのだから、OLと比べてしまうのは失礼か。

「はい、どうしても魔王様との謁見をできる限り早く叶えたい事情がありまして……押しかけてしまいました。よろしくお願いします」

さてと、ここからが本番だな。どんな試験を言い渡されるのか怖い、逃げ出すのだけは許されん。気合いを入れていつてみよう。

## 2

「まずはそこに座ってくれ。急いでいるということだからな。前置きはやめて、本題に入ることとしよう。早速だが、私の姿を見てどう思う？」

ほえ？ それは一体どういうことだろ？ とりあえずもう一度、目の前にいるマドリアさんをよく見てみる。

下半身が蛇であるのに加えて、上半身は翼があるというお姿。しかし、龍の国でも下半身が蛇のようになっている人はいたし、妖精国には色々な姿の妖精がいたからなあ。このぐらいではもう驚きもない。

「どう思うと言われましても、別に何とも思いませんが……」

自分がそう答えると、腕組みをして考え込むマドリアさん。予想外の返答だったのだろうか？ 次に問いかける言葉の内容を、とても慎重に選んでいるような気がする。

「本当に何とも思わないのか？ この私の姿を見ても？ 人族から見ればかなり異様な姿だろうに」

と、ことさら下半身の蛇の部分を強調しながら言ってくるが、そんなことをされても答えは変わらないのよ。これにはボーカーフェイスも一切必要ない。何せ本心だからね。

「えーと、ご期待に添う返答かどうかは分かりませんが……多少姿が違う程度で恐怖心なんか持ちませんよ。今まで私は色々な国を巡り、色々なものを見てきました。その中には、マドリアさんのように人とは違う外見を持つ方もかなりいました。例を挙げると、ハーピーさんにケンタウロスさん、人魚さんにドラゴンさんといったところでしょうか」

じつと聞いていたマドリアさんの表情が、人魚やドラゴン、と言ったところで面白いように崩れた。そしてぼろりと「なるほど、先にそんなものを見てれば動じるはずもないか」と呟いていた。外見の違いで怖かったのはドラゴンさんかね。体格の違いが大きかったからな……話が通じて本当によかったよ。

「今までの経験からくる価値観か、よく分かった。しかし、お前は私に対する敵意が全くと言っていいほどにないな。それはなぜだ？」

戦うな、と先に教えてもらっているから……というのではダメだ。となると、こういう言い方にしてみるか。

「質問に質問で返すのは失礼ではありますが……逆になぜ、敵意を持たねばならないのでしょうか？　かつて魔法を撃ち合ったり武器をぶつけ合ったりしたのであればともかく、魔族の皆様とは厄介な敵を倒すために肩を並べて戦った戦友であります。そういったことがあったために、真に勝手ながら、自分は魔族の皆様に対して一定の信頼を寄せております。その上、いきなり押し掛けたのにもかかわらず、こうして話し合いの場を設けてくださった。そんな方々に対して、敵意を持つはずがありません」

こんなところか。嘘ではないから、問題はないだろう。

「何というか、良い意味で拍子抜けしたな。今まで押し掛けてきた者たちは、私をはじめとした魔

族の姿が自分と大幅に違うという理由で、一方的に敵意を向けたり罵<sup>のの</sup>たりしてきたものだ。そういった輩<sup>やから</sup>が多かったがために、ここ最近では国交を最小限に絞っていたのだが……それなりに時代が変わったということか？」

今気がついたが、マドリアさんの眉間に僅かにあったしわが消えている。やつぱりそれ相応の警戒はしていたんだな。警戒のランクをやや下げたからか、実はさっきから感じていた微弱な電流みたいなピリピリしたのもなくなった。

「歴史を鑑<sup>かん</sup>みれば、そのような危険を考えて他種族に警戒心を抱き続けることは仕方がないかもしれないね。今は穏やかな妖精族も、過去には多くの種族に対して戦争を仕掛けたそうだし」

これは、フェアリークイーンをはじめとしたこちらの世界の人とのやり取りを通して分かっていたことだ。今は穏やかに見えるこの世界も、時代によっては凄惨<sup>せいさん</sup>な状況に置かれていた。もし、今でも偏見が強かったのならば、そのような阿鼻叫喚<sup>あびきょうかん</sup>の世界が展開していただろう。考えたくないなあ。

「ある程度、歴史を知っているようだな。実は私の祖母がその時代の妖精たちと戦っていてな。私達は長寿を誇る種族であるにもかかわらず、祖母は戦いによって受けた傷から毒が回ったために短命であった。そういったこともあってな、外見が違うというだけで争いを吹っ掛けてくる者がやってくる可能性を考えないわけにはいかんだ」

世界が違っててもそういう部分が同じつてのは、嫌なもんだな。地球だってそうだ、肌の色の違いが差別や争いの元になった例はいくらでもある。そして、そんな出来事は未だに消え去っていない。「そういうことであれば、警戒なさるのも当たり前かと。ましてや自分は、いきなり現れておいて魔王様に会わせてほしいという滅茶苦茶な要求をしているのですから」

と、言ったところで、ふと気になったことを質問してみるにした。

「あと、これは興味本位なのですが……魔王様を勝手に悪党に見立てて攻め込んできた者たちは、今までにどれぐらい存在しましたか？」

RPGのお約束というやつだね。まあ、そっちのほうは実際に魔王が世界征服などの悪事をたくさんでいるわけだが、この「ワンモア」世界においてはそんな単純な話ではないだろう。

「——ああ、細かい数字は面倒だから言わぬが、相当な数に上るぞ。もちろん、歴代の中には悪事を行ったクズ魔王もいるから、そういった時代に攻め込んできたのを除いての話だがな」

ああ、やっぱりいるのか。というか、クズ魔王って言い切ったよこの方。

悪事に手を染めた一部の魔王様が、魔族にとつてはた迷惑な存在だったことは想像に難くないが、それでもそんなに言い切っちゃうのか。

「それに比べて、今代の魔王様は素晴らしいお方だ。だからこそ、不埒な考えを持つ者を近づけるわけにはいかん。まあ、いきなり戦いを挑んでくるような輩が今の魔王城に現れた場合は、即座に

排除だな。あのお方のお手を煩わせるわけにはいかぬ」

おおう、さっきまでとは打って変わって、崇拜すら感じさせる雰囲気だ。心なしか、頬が赤いような……もしかすると、今代の魔王様はめちやくちやイケメンなのかもしれないな。崇拜心と恋心が入り混じっている可能性もあるし。その辺には突っ込まないほうがよさそうだ。地雷を踏むことになりかねん。

「とにかく、少なくともお前は魔王様に対する悪意を持っていないことは理解した。次の四天王の下に向かうがよい。この先でも、愚かな行動はしてくれるなよ？ もしその場合は……」

マドリアさんはここで言葉を区切り、じろりと自分のことを睨んだ後にひと言。

「私が直々に殺すぞ」

実にシンプルですね。分かりやすく素晴らしい。あれこれ当たり障りのない言葉を交わし合う『大人の会議』にはないシンプルさが実にいい。

自分は椅子から立ち上がって『理解しています』とばかりに深く一礼し、入ってきたドアへと向かう。

「それでは、失礼いたします。ありがとうございました」

そう言い残して部屋を後にする。

外に出たところ、メイドのミスエさんが一人で待っていた。おそらく試験通過を認めたマドリア

さんが、何らかの方法で待機しておくようにと伝えておいたんだろう。

「一人目の試験、お疲れ様でした。続いて二人目の四天王様のお部屋へと案内いたします。ついてきてください」

そうして再び、ミステさんの案内で魔王城の中を歩く。

さて、一人目がエキドナという自分的にはあまりなじみのない種族が出てきたな。この分だと、四天王の残り三人も変わった種族である可能性がある。その点を考慮した上で挑むことにしよう。ま、戦いになる可能性は多分低いし……大丈夫だろう。

### 3

「無事に最初の試験を通過されてほっとしました。敵意がある方ならともかく、そうではない方が生きて戻ってこれないのはさすがに後味が悪いですから」

次の四天王が待つ部屋に向かう途中で、ミステさんがそう話しかけてきた。

「おかげさまで何とか」

と、相槌<sup>あいづち</sup>を打っておく。といっても、さすがにフィクションにありがちな脳筋<sup>のうきん</sup>とかじゃない限り、

そう簡単に相手の不興を買って「殺すしかない」なんて結論に到達することはまずないでしょうに。「先程お会いになられたマドリア様は、少々過激なところもございまして……その、ご本人に面と向かって言うわけにはいきませんが、怒りの沸点が極端に低くてですね……特に魔王様を貶<sup>げな</sup>すような発言を軽々しく口にした方は、それはもう凄惨な結末を迎えることになるかと」

——国のトップである魔王様を貶<sup>いや</sup>されたら、沸点が低い高い関係なく魔族の皆さんは怒るべきだと思うのですが如何<sup>いかに</sup>でしょうか？ という感じで、ミステさんに問いかけてみると……

「ええ、それはそうなのですが。でもまずはそんな風に言わないように相手の方を窘<sup>ひた</sup>めるべきですよね？ 忠告を無視して言い続ける方であれば、それ相応の結末をたどっていただきます。しかし、マドリア様にはその最初のひと言が絶対にあります。いきなりバツサリです。なので、今ここでこうして貴方様が生きていることは、魔王様に対する暴言を吐いたりしなかったという証明になります」

あ、そんな部分の審査もあったのか。でも、自分には魔王様を貶<sup>いや</sup>そうなんて考えは初めからない。なのでそこで引かかる恐れは最初からなかった。

「そういえば、マドリア様の魔王様に対する忠誠心は特に高いようにお見受けしました。ただ、少々行きすぎているような気もしましたが……不躰<sup>ふしづ</sup>ながら伺いたいのですけど、今代の魔王様は男性なのですか？ 女性なのですか？」

マドリアさんが頬を染めていたような気がするから、多分男性なんじゃないかというのが自分の予想。その上で紳士的なイケメンで、なんでもできるパーフェクトなイメージが頭の中で構築されていた。

さて、自分の質問を聞いたミステさんのだが、なんだか様子がおかしい。そもそもメイド服が動いているだけで、顔は見えないのだから表情は分からないのにもかかわらず、困惑しているかのような感じが伝わってくるのだ。

「も、申し訳ないのですが、それは魔王様と謁見できたときのお楽しみということで。ええ、ええ、ええ」

——何だこの返答は。な〜んか引つかかるな。ゲヘナクロスのときに援軍を出したり、新しい魔道具を生み出して魔王領で活動しやすくなるようにしてくれたり、少なくとも他種族にも友好的であることは間違いないと思うが、ひと癖ふた癖あるんだろうか？

まあ、魔王様じゃなかったって、王様ってのは大抵なんらかの特徴を持っているのがお約束っぽいけどさ。

「そうですか。こちらとしても無理に聞き出すつもりはないので、謁見が叶ったときのお楽しみとしておきます」

と、自分はこの話はさっさと切り上げる。言いよんだところにツツコミを入れても、基本的に

いいことはない。商談や勝負の駆け引きならば、絶対に突っ込むべきだがね。

しかし、今は突っ込むとその先にはおそらく地雷原がある。そう、地雷ではなく地雷『原』だ。触らぬ神に祟りなしである。

「そうしていただければ。そろそろ、次の四天王様が待つお部屋です。準備はよろしいですか？」もう次の部屋か。さて、次はどんな相手が待っているのだろう。お手柔らかに、と言いたいが、さすがにそれは無理な話か。

最初のときと同じように「ここからはお一人でお進みください」と言われて、一本道を進む。その先にあった部屋のドアにノックを三回。そして「どうぞお入りください」との返事を聞いてから、ゆっくりと中に入る。

「お待ちしておりました。私はサキュバスクイーンであり、四天王も務めているヘテラと申します。よろしく願いますね。こちらの椅子におかけください」

そう言ってからゆっくりと優雅に頭を下げるヘテラさん。

次はサキュバスさんですか。これはファンタジーではおなじみの種族ですね。特にR・18のアーハンなこと出番が多いね。

ただ、サキュバスクイーンというところに引っかけを覚える。

なんでサキュバスの女王が四天王をやってるんだろ？ 魔王様の嫁候補とか？ 確かに蒼いロン

グヘアーは実に見事だし、美人さんだからそう言われても納得するけど。

「これはご丁寧に。私はアースと申します、本日はよろしくお願いいたします」

こちらも丁寧な頭を下げた後、勧められた椅子に座る。

改めて見てみると、ヘテラさんはサキュバスとしてはかなり異端な服装をしていた。サキュバスというと、露出が多いとか、全裸で肝心な部分を髪の毛や翼で隠しているだけとか、基本的にきわどい外見をイメージするだろう。実際自分もそういうイメージが強い。

しかし、今日の前にいるサキュバスクイーンのヘテラさんは、上半身はロングケープとか何とかいうとにかくケープのような物を纏っており、下半身はズボンにシューズで一切肌の露出がない。おそらくケープの下にも、それなりに着込んでいるはずだ。

「話をする前に、前もって申し上げておきます。人族の間ではサキュバスというと大胆な姿で男性にぐいぐいと迫るイメージが強いようですが、私たちはそんなことは致しません。そのような形で迫るのは心に決めた伴侶<sup>はかりよ</sup>だけであり、それ以外の男性の前ではご覧のように一切肌を晒<sup>さら</sup>さないようにしております。本音を言えば顔も仮面をつけて隠したいのですが……さすがにそれはやりすぎとなりますので」

あ、世界のあちこちから幻想<sup>おぼろげな世界</sup>が木っ端<sup>はた</sup>みじんに砕けた音がした気がする。なんとなく、『サキュバスには期待していたのに！』とか『ワンモア』だから、ギリギリまで攻めると思ったのに！』

とか『裏切ったな！』とか、そんな男性陣とごく一部の女性陣の絶叫というか断末魔というか、そういう感じのものが耳に入ったような……幻聴だよな？ VRに入るためのデバイスが故障した可能性もあるな、エラーが発生していないか後で確認する必要があるそうだ。

「了解です。むしろこちらとしても、そんな風に肌を隠していただくほうが落ち着いて話ができるので助かります」

これは本心だ。イメージ通りのサキュバスが出てきたら刺激が強すぎて、論戦を仕掛けられたらめためたにやつつけられたかもしれない。こちらのサキュバスの貞操観に心から感謝しよう。

「そんな返事をなさるとは意外ですね、てつきり、人族の男性であればがっかりなさると思っていたのですが」

そうだね、がっかりする人も大勢いると思いますよ。たまたま自分はその範疇<sup>はんちゆう</sup>にいなかったというだけで。というか、試験を受けに来たというのに、まだ世間話しかしてないような。

「確かに美人の相手ができるのは、男として夢の一つではありますね。ですが、相手があまりに美しすぎると気後れしてしまうこともありますし。女心は難しいなど言いますが、男心もなかなか複雑で繊細な面があるのですよ」

あー、キザすぎる言い方になってしまった。こんなの自分じゃないな——とはいえ、一度口から出た言葉はもう引つ込めることができない。

やっぱり美人ってのは恐ろしいね、知らず知らずのうちに、本来の自分を覆う仮面を被ってしま  
う。いい格好をしたいというわけじゃないんだが、どうにもこうにも。  
またまだ自分も青いつてことか。ハードボイルドなんて言われる渋い男<sup>しほ</sup>には、到底なれそうも  
ない。

「ふふつ、そういうことにおきましよう。確かに心とは難しいものですからね。たとえ頭では  
冷静に物事を考えているつもりであっても、心がそれを許さないということも往々<sup>おうち</sup>にしてあります  
し。ですが、だからこそ私たちには熱があり、生きていると言えるのでしょうか。全てを冷静に考  
えるだけでは面白くありません。もちろん、四天王として肝心なところに感情を持ち込んではいけま  
せんが」

なんとなく、哲学的なニュアンスだな。色恋沙汰よりも、生きる意味を考えるサキュバス……う  
ん、悪くないかもしれない。

そりゃ、一般的ではないかもしれんよ。でも、この「ワンモア」の世界なら、十分にアリなん  
じゃないだろうか？ 元々こういうイメージだからこうしなきゃいけない、なんてルールは、この  
世界には不要だ。

「その、四天王というお言葉が出て思い出しましたが、試験のほうはよろしいのでしょうか？ 今  
まで雑談のようなことしかしておりませんが……」

そう、そろそろ試験を始めてもらわないと。厄介事が終わったらこんな風にのんびりと言葉を交  
わすのもいいのだが、今はさっさとやつつきたいことが待っているからな。そのために魔王様に謁  
見しないといけないから、こうして四天王の皆様と会っているわけで。

「そうですね……試験は、もうすでに始まっていますよ？ そして、今終わりました。アース様  
は、次の四天王の試験に進んでいただきます」

もう終わった？ どういうことだ？ 話をしていた時間はほんの数分だ。なのにもう試験は終  
わったという宣言。そうなると、今まで話した内容に何かがあったんだろうが……とにかく、叩き  
出されないのだから、何とか通過ラインは越えたのだと信じたい。

「どういった試験なのかは全く分かりませんでしたが……とりあえず次に進むことにします。お邪  
魔しました」

そうして自分が頭を下げ、部屋を出ようとしたとき、背後からヘテラさんの声がかかる。

「個人的には、ぜひ魔王様との謁見が叶ってほしいですね。試験はあと二つですが、貴方ならおそ  
らくそう苦しむことなく通過できると思います。頑張ってくださいね」

そんな応援を受けて、二人目の四天王であるサキュバスクイーン、ヘテラさんの部屋を失礼した。  
さ、この調子で三人目に行こう。



三人目の四天王の部屋への案内を受けている最中、自分はつい、はあーっとため息をついてしまった。

「あら、どうなさいました？」

そんな自分の様子を見て、ミステさんが足は止めずに問いかけてきた。

「いえね、四天王の皆様と会わねばならないという説明を聞いたときは、かなり緊張したんですよ。どれほど恐ろしい猛者<sup>もさ</sup>が出てくるのかと。何せ魔王様の直近の方々ですからね。しかし蓋<sup>ふた</sup>を開けてみれば、別の意味で恐ろしさを感じる方が連続で出てくるので」

実力があるから四天王の座にいるわけで、そこは別に男女の違いは関係ないだろう。が、無意識のうちにものごとこう、覇氣<sup>はき</sup>のある武將的なイメージをしていたのは否<sup>いな</sup>めない。

ところがどっこい、外見こそ下半身が蛇だったりしていたが、ここまで二人ともかなりの美人さんだったことにはびっくりさせられた。

だが、そんな外見に騙されてはいけないことも理解できた。最初のマドリアさんは分かりやす

かったが、次のヘテラさんも穏やかなのはあくまで表面だけ。実は、ヘテラさんからもなんとも言い難い、こちらを押し潰すような威圧を受けていたのだ。それに気がついたのは、部屋を出てしばらく経ってからだが。

あれは、何らかの精神攻撃を受けていた可能性があるな。そしてそれもまた試験の一つなのかも。「見た目は美しい皆様ですが、その気になれば一日で一つの街を地図から消せる力をお持ちですからね。私たちも無礼を働けば一瞬で消されてしまいます。幸い、そんな力と共に、それをむやみやたらと振り回さない心もお持ちですが」

ああ、やつぱりそんなレベルの実力者か。なら、自分一人を一瞬で消すこともたやすいだろうな。〈黄龍変身<sup>こうりゅうへんじん</sup>〉すれば粘<sup>ねば</sup>れるかもしれないけど、試す気にはならない。

「やはり、実力と心の両方を兼ね備えていらっしやるんですね」

力だけでは暴力、心だけでは何もできない、と言ったのは誰だったか。妙に心に残っている言葉だ。

「はい、そうでなければ四天王として選ばれませんから。ただの暴れん坊ではダメです、論外です。力と心を持った上で、今回のような試験を行える知力や応用力など……あらゆる力を要求されます。だからこそ、四天王の皆様には全ての魔族が敬意を払うのです」

心身共に強くなければ人の上に立てない、というのは大いに同意できるな。

「そして、そろそろ三人目の四天王様がお待ちしている部屋です。心の準備をお願いしますね」  
さて三人目。次はどんな方が出てくるのやら。一人目がエキドナ、二人目がサキュバスと、共通点もないからさっぱり分からんなあ。とりあえず部屋に入ろうか。

「——来たね。まずは座って。おそらく前の二人はお茶の一つも出さなかったろうから待ってて」  
四天王三人目は、肌がかなり白く、フードを深めに被った女性だった。

それにしても、三人目も女性か……魔王領でも女性が強いつ代なんだろうか？　とりあえず言われた通りに椅子に座って待つこと数分。部屋の奥から紅茶の香りを漂たなよわせながら、彼女は戻ってきた。

「はい、どうぞ。私の趣味の紅茶だけど」

良い香りだ。紅茶の知識なんてほとんどないが、この香りだけで良いものであると理解できる。そつとカップに口をつけて、まずはひと口。うん、程よい苦みと甘さ。これは自分の腕では出せない味だ。

「素晴らしい味です、ホツとします」

しばらく二人で対面に座って紅茶を飲み、落ち着いたところで、フード姿の女性が自己紹介を始める。

「そろそろ喉も程よく湿っただろうから、話を始めようか。私はデス、死神よ」

——すごいな魔王様。死「神」さんまで四天王、つまりは配下に置いてあるんですか。

「デスさんですか。私はアースと申します」

カップをテーブルに置き、こちらも名前を告げる。

すると、デスさんはきよとした表情を浮かべた。ついでに深めに被っていたフードがずり落ちて、素顔が晒される。素朴系美人？　派手さはないが奇麗だな。

「貴方は私が怖くないの？　自分で言うのもなんだけど、私は死神だよ？　死を司つかさどる神だよ？　まあ、まだ死神としては半人前だけど……死神って、人は物凄く怖ろしいイメージを持ってるんじゃないかった？」

ああ、そういうことか。なんで急にあんな表情を浮かべたんだろうかと思ったが、そういう事前情報と自分の態度があまりにも違うから、理解が追い付かないのかもしれない。

「そうですね、確かに死神に対して畏怖いふの感情を持つ人は少なくともいないでしょう。死というものは恐ろしいですから」

ここで自分はいったん言葉を区切り、紅茶を口に含む。そうして紅茶の味を楽しんでから、話を続ける。

「ですが、そういった死神は大抵、積極的に大鎌を振るって殺しに来るものですね。骸骨がいこうが黒いぼろのローブを纏った姿で現れ、問答無用で無慈悲に命を刈り取る。故に怖ろしい、と」

よくゲームでアンデッド系のモンスターとして扱われる死神は、こういうイメージだろう。特にボスとして登場する場合、即死させる技を持っていたりするから、尚更恐怖の対象となる。

そうそう、冒険中盤までは絶対に倒せず、逃げ回るしかないというパターンもあったな。で、追いつかれると呪われて色々と悲惨な状況に追い込まれるんだって。

「うーん、「ワンモア」でも、そんな罠が前にあったんだって。」

「ですが、それは本来の死神の姿ではない」

—— かどうかは不明だけど、わざわざ心証を悪くする必要もないだろうってことで、ここは断言しておく。

「本来の死神とは、死した者が迷わぬようその後に向かうべき場所へ導く案内人。行き場所に迷ってワイトなどのモンスターになってしまわぬようにする神。それが本来の死神」

と、いう見方をする話もある。地縛霊や浮遊霊といった形で現世に執着し、いつまで経っても浮かばれないなんてことがないように、死んだ人の靈魂をきちんと輪廻転生の輪へと戻す役を担うのだ。けどどやっばり、ゲームとかフィクションでの死神の役割っていうと、デストラップ役とか、追い掛け回してくる恐怖の存在というのが多いのも確かではある。

「—— 驚いた。人族の間でも死神についてそんな風に伝わっていることがあるなんて。そう、私は今貴方が言った通りの案内人。老衰、病氣、大怪我などで死した者たちの魂を、きちんと行くべき

場所へと届けるのが私の仕事。逆に言えば、死すべきではない者、助かる可能性のある者には治療も施す。死神は決して、死を呼び寄せる不吉な存在ではない。人族がそれを知っているとは思わなかった」

ああ、この子はそっちの役割を持つ死神なのか。だけど……

「そうでしたか。しかし、そうなるとなぜ、その死神様が四天王をなさってるんですか？」

という疑問が湧いてくる。何も魔王様に仕える必要はないと思うのだが。

「私がここにいる理由は、死神という存在を魔族の方々に正しく理解してもらうためと、治療法の伝達のため。人族風に言うのであれば、私は戦える医者。様々な病氣に対する治療法が間違っていることを私が指摘したら、魔王様からしばらく四天王として魔王城に滞在し、知恵を分けてほしいと頼まれた。なので、正確に言うのであれば、私は魔王様の配下ではない。魔王様の人格が良いので、その手助けをしているに過ぎない」

あ、そうなのね。あくまで協力者ってことか。うーん、でもそうなるともう一つ聞きたいことが。「もう一つ質問してもよろしいですか？ 死神様がここにいると、魔族の皆様は死後に迷うことはないでしょうが、他の種族が大変なことになるのではないですか？」

この質問に対する返答は……

「大丈夫、各種族に合わせた死神がいるから。私が魔族担当というだけ」

だそうだ。各種族に対応した死神がいるという点はちよつとびつくりした。

「では、次は私から質問する。貴方にとって『闇』とは何？」

「闇、ですか。闇は闇、それ以上でもそれ以下でもない……という形式ばった答えを聞きたいわけではないですよね？」

自分の言葉に、デスさんは「ん」と言いながら頷く。

そうなると、どう返したものかな。

「繰り返しますが、闇は闇でしかない。決して悪というわけではないし、毒などのように害あるものでもありません。残念なことに、そんな闇に乗じて悪事を働く者が大勢いることは否めませんが、それは闇が悪いのではなく、闇を悪用した者が悪い。そういった背景があり、一時期には闇は悪で光が善という風潮が出来上がっていましたね」

ひと昔前は、闇に閉ざされた世界を光の戦士が救うってストーリーパターンで、闇が一方的に悪役をやらされた例はかなり多い。まあ、分かりやすいっちゃ分かりやすいんだけど。

「が、闇は安らぎをもたらしてくれることを忘れてはいけない。夜は穏やかに眠ることができるのは、闇が優しく包んでくれるからとも言える」

もちろん、中には明るくないと眠れない、という人もいるけれど……：日中の眩しい光の中で眠るのはちよつと厳しいだろう。世界が光一辺倒となったら、それはそれで過ごしにくくなる。

「そう考えれば、光と闇は表裏一体。どちらかがあるから、もう片方も認識できる。そうなると、闇とは世界の秩序の一つ。つまり、自分にとって闇とは『なくてはならない存在』ということになると思います」

〈義賊頭〉としての立場からもね。状況によつては昼間のこともあるにしても、基本的に〈義賊頭〉として動くのは夜だ。最近はこのといった事件が発生していないのでご無沙汰だが。もちろんご無沙汰なほうがいい、それだけ平和だつてことなんだから。

「なくてはならないもの、か。これもまた、私の予想とは全く違う答えが返ってきた。私の予想では、恐ろしいものであるとか、邪悪な一面を持つだとかの返答が来ると思っていた。なるほど、貴方には闇に対する偏見はないようだ」

特定属性が好きだ、つてのはあるけど、偏見はさすがにないな。闇という属性が悪いんじゃない。このたとえとして、よく包丁が用いられるな。人に向ければ凶器となる。しかし調理道具としては非常に便利で欠かせない。結局、ごく一部の例外を除いて、悪いのは道具や技術そのものではなく使う側である、ということになるだろう。

「まあ、これまで闇と関わるが多かったということもありますからね。自分が持っている魔剣も闇属性ですし」

四天王の試験を受けるにあたってメイドさんに預けてきたので、今ここにはありませんが。

あとは、フェアリークイーンも闇属性。今回の依頼を頼んできたダークエルフの守護者様も闇属性だ。アクアは水属性だけ……自分は闇属性を持つ者たちと頻繁に係<sup>か</sup>わつてきている。〈義賊頭〉のスキルだって、闇系統に属すると判定されてもおかしうはない。

「なるほど。貴方自身が闇であるとはいなくても、それなりに多く関わってきたからこそ、偏見がないということか。魔族は闇属性の魔法を得意とする者が多い。そして逆に光属性の魔法はあまり得意ではない者が多い。そのため、光を善とする者たちとは幾度となく争ってきた背景があると、先輩の死神から聞かされていたが……貴方にはそういった考えはないな。これならば、次の四天王への道を開いてもいいと私は考える」

どうやら、デスさんにも認めてもらえたようだ。

「人には色々な考え方があってのは分かる。でも、闇だから、あるいは光だから、という理由だけで安易に善悪を決めつけるのはよくない。そのことをこれからも忘れないでほしい」

デスさんの言葉に頷く。少なくとも、この世界ではその通りだな。

「それでは、失礼いたします」

頭を下げて部屋から退出する。さて、これで残る四天王はあと一人か。どんな方が待っているのやら。

## 5

「お待ちしておりました。では、ご案内いたします」

ミステさんの案内に再び導かれ、魔王城の中を歩く。それにしても上ったり下ったり、左右に曲がったりで、なかなか大変だ。

「魔王城の中はまるで迷路ですね」

自分の言葉に、ミステさんは「ええ、そういう形を取っています」と返答。ありや、本当に迷路なのか。

「許可なき侵入者の足を止めるべく、魔王城の通路は複雑に作られています。壁を破壊することで無理やり前進されることを防ぐために、壁にも強化魔法が掛かっていますよ。あまり詳しくは申し上げられませんけど」

ラストダンジョンとして魔王城が出てくるのもよくあるパターンだ。そういう面は踏襲しているらしい。ただ、その分メイドの皆さんの仕事がかさむようで、あちこちから、

「掃除が面倒よね」

「仕方ないわよ、魔王様の居城なんだし」

「でももうちょっとすつきりとした形だと仕事が楽なんだけどな」

「シッ！ メイド長に聞かれたら大目玉を食らうわよ！ 話もいいけど手を動かして！」  
なんて会話がたまに聞こえてくる。

「あ、あはははは……その、聞かなかったことにしていただけると大変嬉しいです」

ミステさんのヘッドドレスには、いつ現れたのか、でっかい汗マークがくっついていていた。変な所で芸が細かい。

「ま、まあ仕事が大変だということは理解できますからね。いちいちメイド長なる方に告げ口はしませんよ。ご安心ください」

多少の愚痴<sup>ぐち</sup>とか不満はしょうがないと思う。それを口に出すことで発散するのは別にアリだろう。大声で言っていたわけではないし、目をつぶってもいい範囲だろう。それすらダメになると却<sup>かえ</sup>って状況が悪化することぐらい、ここのメイド長とやらも多分理解しているんじゃないかな？ 部外者である自分の耳に入っただけは、まずいかもだけど。

「あの、メイド内で言い合うぐらいならよいのですが、外からいらっしやっている貴方様の耳に入っただけが少々まずいと言いますか」

あ、自分と同じところを気にしているのか。考えがほぼ一緒と見ていいのかなこれは。

「重ねて言いますが、口外はしませんので。そもそも自分は押しかけてきた立場ですからね。あれこれ言う資格はないと思いますし」

さすがにアポを取った上でやってきた客に愚痴が聞こえるようではまずいけど、今回はそうじゃない。そんな自分が、余計なことを言うものではない。

「そうしていただけると助かります。お話の分かる方で良かった、あの子たちも命拾いしましたね」

なんか、物騒なことを言っているんですが。ちょっとだけ聞いてみるか。

「命拾いって、どういうことでしょうか？ メイド長はそこまで厳しい方なのですか？」

この問いかけに対するミステさんの返答は……

「ちょ、ちょっと頭が痛いので、その件に関するお話はご容赦いただけると助かります、はい」

ミステさんは急に歩き方がぎこちなくなり、宙に浮いているメイド服全体が小刻みにブルブルと震え出した。

——トラウマになっていらっしやる。これは深く突っ込まないほうがいいですね。

「そ、それでですね。最後の四天王様はあちらの部屋にいらっしやいます。どうぞ」

そんな話をしていたら、どうやら到着したらしい。さて、最後の一人は一体どんなお姿をしているのやら。

「お待ちしておりました。まずはこちらにお掛けください。改めまして、メイド長と四天王を兼任しております、リビンググアーマーです。個人名もあるのですが、名前を知られてしましますと色々問題がありますため、名乗ることができません。なにとぞご了承ください」

四天王最後の一人は……最初にお会いしたリビンググアーマーさんでした。勧められた椅子に腰を下ろし、まずはひと息つく。

「さて、実は今まで貴方様が出会った四天王たちとの受け答えと、これまでの行動を大まかに調べさせていただきました。方法は内緒です」

リビンググアーマーさんは唐突にそう告げてきた。これまでの行動つてのはどこまでを含むんだろう。目の前の報告書らしき物をめくって、リビンググアーマーさんは話を続ける。

「えー、妖精と龍の国にはそれなりに顔が利くようですね。また、ゲヘナクロスとの戦いにも参加し、獣人連合内で突如起こったバッファローの大群との戦いにも顔を出しているようですね……なかなか活躍なさっているようで」

っ！ そんなことまでこの短時間で調べ上げた、だと？ 最初に会って自己紹介をしてから……まだ二時間も経過していないぞ？ これは各方面に何らかのパイプがあるな。いくら魔法で短縮できる部分を短縮しても、二時間足らずでそこまでの情報を集めることはできない。

だが、〈義賊頭〉としての活動内容については一切触れない、か。そっちがばれていないなら、何ら問題はないな。

「——といった感じの旅を続け、魔王領に入った直後、この城にやってきた。間違いはありませんか？」

と、こちらに確認を求めるリビンググアーマーさん。隠すようなことはないから、素直に答える。

「ええ、間違いありません。それにしてもよく調べ上げましたね……かなりあちこちを行ったり来たりしてきたのですが」

ここであれこれ聞こうとしても、どうせ『メイドですから』でごまかされそうな気がする。ファントジャリーにおけるメイドつて、可愛いだけではなく、戦ったり情報収集をしたりと多才な子が多いしね。メイドと言え、あのダークエルフのメイド三人組は元気でやってるかな。

「収集した情報は、この後破棄<sup>はき</sup>します。あくまで魔王様と謁見させても問題ない人物か否かを確認するためだけに集めたものですので、確認が取れた今はもう不要です」

言うが早いか、分厚い報告書を自分の目の前で部屋<sup>すみ</sup>の隅にある暖炉に突っ込み、火をつけて燃やしてしまうリビンググアーマーさん。外の気候に反して城の中は十分暖かいので、ただの飾りなのかと思っていたが、こういう風に使うのか。

「さて、私の試験ですが……実はもう終わっております。それと同時に、ここまでの試験の意味

などを発表しようと思います。こちらの考えを一切教えないのでは、そちらも気味が悪いでしょうから」

いや、別に。何かにつけ、知らないうちに試されるなんてのは世の中ではしょっちゅうだしねえ。とはいえ、いちいちそんなことを告げる必要もあるまい。ここは大人しく話を聞こう。

「まず、最初のエキドナのマドリアの試験は、『自分の姿とは大きく異なる姿をしている者でも受け入れるか否か』の審査です。特に彼女は、背中から翼が生え、下半身は蛇というエキドナですからね。受け入れられない者は簡単に拒絶反応を示します。たとえばポーカーフェイスを保てたとしても、一瞬目に浮かぶ脅えや嫌悪は隠せません。そして、そういったものを見逃さないのがマドリアなのです」

あー、うん。これは分かりやすかった。何せ下半身の蛇の部分をことさら強調してきたからね。あれで自分の目に嫌悪感とかが浮かんたら、即座に不合格だったんだろう。

残念ながら、もう色々と見てきちゃったこっちにしてみれば、一つの種族特性としか思えないんだよね。別段嫌悪感を抱くこともない。

「次のサキュバスクイーンであるヘテラの試験は、『色欲に簡単に流されるような心弱き者であるか否か』を見るものでした。サキュバスという種族が持つ色香は、多くの男性を惑わしてきました。肌を晒さない彼女であっても、その力が減じてはいません。美しかったでしょう？　そして、彼女

が誘惑の精神魔法を放っていたことに気がつかれましたか？　それらに負けて彼女に襲い掛かるようでは、失格でしたね」

ああ、何かされていたなーとは思っていたが、そういうことか。にしても、その手の精神系魔法ってこの世界の人相手ならまだしも、プレイヤーに効くのか？　だが、色々と変な部分があるのが「ワンモア」だし……追及するのはちょっと怖いから黙っておこう。

「三番目の死神のデスの試験は『闇を一方的に悪と見なしていないか』ですね。魔族は種族の関係上、光系統の魔法や技術は苦手で、闇系統の魔法などが得意です。そのため、光を正義、闇を悪と断じる者から一方的に攻撃を仕掛けられたことが多々あります。そしてそれが他の種族との戦争の切っ掛けになったことも一度や二度ではありません。今は時代が変わって、そういった考えはかなり薄れましたが……やはり、ゼロにはなっておりません」

あーうん、とくに宗教関連でそういう考えが根強いと面倒だよな。もしかすると、過去妖精たちが各国に攻め入っていた時期ってのは、そういう腐れ宗教が原因だったのかもしれない。で、それをやめる妖精の王が出てやっと、侵略行為が収まった、と。

宗教が理由でなると、なかなか終わりが見えないんだよね。これも歴史が証明してる。

「そして最後の私ですが……やってきた人物の情報を集め、それらの情報と、事前に試験をした四天王三人の評価から、魔王様に謁見する資格があるかどうかを判断するのです。なので、四天王の



前でだけ猫を被つても無意味、というわけですね。魔王様に害をなそうという者が掃いて捨てるほどいた時代があり、そのときの名残もあって、このような判別方法を採用しているのです」

何せ魔族の王様だもんね、謁見したいという者がいればそれぐらい調べるのは当然だろう。が、自分も今回ばかりは遊びでも好奇心でもなく、引けない理由があるから、落とされるわけにはいかない。

かといって、ダークエルフの守護者様から預かっている手紙を先に出して、これを見れば分かるはず——なんて方法は、要らん混乱を招く可能性があった。確認のために封を開けるなんて言われるのを避けたかったから、自分は素直に試験を受けたのだ。

「なるほど、そういうわけで、ここにやってきた時点でああなたの試験は終わっていることになるのですね。では、今回の試験の合否を教えてくださいますか？」

もし否だった場合は……また何か手を考えよう。とにかく四天王の皆さんと顔を合わせることはできたのだから、例の手紙を魔王様に届けることぐらいは何とかなりそう、か。その場合、自分で直接持つていけないのは気がかりだが。

「では、発表します。アース様の魔王様謁見許可の合否、それは……」

なぜそこで溜める。そしてどこからともなくリビンググメイドが数名やってきて、一斉にドラムロールを始める。そんな知識をどこで手に入れた！　そしてまだ溜めるんかい！　こんな焦りを煽

るような演出は要らない！

「……合格です！　四天王の評価が良く、今までの行いからも魔王様に狼藉を働く人物ではないと判断できます。魔王様もすでにスタンバイしておりますので、早速謁見に向かいましょう！」  
魔王様がスタンバイしてるって何ですか。カタパルトにでも乗って、いつでも行けますってことです。

……いや、これが「ワンモア」の世界だ。常識なんかかかなくなり捨てるべきなんだ。色々と不安なんだが、どの道、魔王様に直接会える絶好の機会を捨てるとい選択肢はない。

「合格と聞いてほっとしました。では……今更と言えば今更なのですが、一つ質問してもよろしいでしょうか？」

早速案内しようとしていたリビンググアーマーさん呼び止める。そのリビンググアーマーさんが『どうしました？　何か問題か？』と言わんばかりに首を傾げたので、話を続ける。

「魔王様に謁見するというのに、こんな冒険者姿のままではよろしいんでしょうか？」

ほら、魔王様に限らず、王様に謁見するときはそれにふさわしい格好をしるつていうのが、一種のお約束的な面があるじゃないですか。一般的に、その場に合わせた物を纏うのは必要なことなんだよ。

「ああ、服装ですか。今回は完全に私的な謁見ですから、そのまま問題ありませんよ。もちろん

公式行事としての謁見であつたならば、それ相應の服を無理やりにも着ていただいたところすけどね」

それでいいのかメイド長。まあ、いいと言うのであればいいんだろう。

幸いこの外套も擦り切れているわけではないし、そんなに不潔にも不衛生にも感じないはずだ。

一応メイド長であるリビングアーマーさんに確認して問題なしと言ってもらえたのだから、よしとしよう。

そうしてまた城の中を案内されて歩くことしばし、ついに謁見室の前に到着する。

「では、中に入つてこちらのメイドの出す指示に従ってください。一応、王との謁見ということになりますので、最初だけはそれなりの手順を踏んでいただきます」

で、謁見室の中に通されていくつかの指示を受けた。まあ、大体予想通りだ。

まず、最初は片膝をついた格好で頭を下げておき、魔王様から「面おもてを上げよ」と言われたところでゆっくりと顔を上げる。それから魔王様の挨拶があり、「して、何の用でここまで来たのかを聞かせてもらおう」と言われた後、「では、恐れながら申し上げます」とひと言断りを入れてから理由を述べる——という流れにしてください、とのこと。

「よく分かりました、その流れに従います」

「よろしくお願いしますね、もう少ししたら魔王様がいらっしゃいます。少々窮屈かもしれませんが

が、そのままお待ちくださいませ」

リビングメイドさんが立ち去り、すぐに謁見室の奥のほうが騒がしくなってきた。非公式なので、部屋にいる人も魔王様の護衛の方々とリビングアーマーさんを除いた四天王の三名しかないようだ。

いよいよだ、これで目的が達成される。そして――

「魔王様、ご入場！ 皆、敬意をもって迎えよ！」

との号令がかかった。

さて、どんな魔王様なのか……ちょっと楽しみだ。

## 6

「魔王様、ご入場！」の号令で、謁見室には静寂が訪れた。

そんな中、コツコツという足音が聞こえてくる。ああ、この足音の主が魔王様なんだな。頭を上げるわけにいかないので確認はできないが、今足音を出すことが許されるのは魔王様だけだ。

足音はやがて自分の前方から聞こえるようになり、さて、いよいよかと身構えた瞬間、それは起

こった。

ズルッ ガン！ べちよっ ドッスーン

(何事!?)

突如起こった四つの音に反応して、つい頭を上げてしまった自分。だが、それを窘める人も警告してくる人もいない。

「ま、魔王様……!?」

マドリアさんの絶叫が響き渡る。

前を見ると、ドレス姿の女性がうつ伏せに倒れていた。しかも、その状態で豪華な玉座の下敷きになっている……一体何が起こったんだ……さっきの音から予想すると……

『ズルッ』で女性が足を滑らした。それから『ガン!』で玉座の手すりに体のどこかをぶつけた。そして『べちよっ』が女性がうつ伏せに倒れた音で、『ドッスーン』は玉座がその上に落ちた音なんだろう。

玉座が空を舞った理由は、女性が手すりにぶつかったときになぜか跳ね上がったのだろう。「ワシモア」世界だと物理法則がたまにサボるからね。

「おはな打った、痛い……」

女性の可愛い声。マドリアさんとリビングアーマーさんが大慌てで、その上に乗った玉座をどかす。そしてそのまま女性をいったん外に運び出していく。あつけにとられている自分に、サキバスクイーンへのテラさんが近寄ってきてこう一言。

「見なかったことにしてください」

いや、見なかったことにしろって……何だろう、これから重要な話をしなければならないというのに、そこはかとなく不安になってくるこの気持ち。

とりあえず、囁いた後はじっとこちらを見てくるヘテラさんに頷いておく。美人から無言の圧力を受けると実に怖いね。

そしてそれから待つこと数分……

「魔王様、ご入場！ これは先程のリハーサルではない！」

をいこら。リハーサルって何なんですかりハーサルって。王様の登場にリハーサルも何もあるものか。が、そこで騒ぎ立てないのが大人だっことは重々理解しますよ。

とにかく、先程のような珍事はそうそう発生することもないだろう。静かに頭を垂れて、魔王様を待つことにする。

再び謁見室に響くコツコツという足音。さすがに今回は問題も発生せず、ドサツと、魔王様が玉

立ち読みサンプル  
はここまで

座に座ったような音がする。

「試験を乗り越えた魔族に理解を示す者よ、大儀である。面を上げよ」

先程聞こえたのとは全く違う、涼やかな女性の声が、謁見室に響く。その言葉に従い、自分はゆっくりと頭を上げ……即座にまた下を向いて咳き込んだ。

なぜなら……魔王様の鼻の穴の両方に、ティッシュのような物で作られたこよりが刺さっていたからである。何これ、何が何でも自分を笑わせようとしてんの!? 今の気分は、小学生時代に牛乳を飲んでいるときに友人が目の前で突如変顔をしてきたときとか、中学生時代に校長先生の真面目な話の最中に教頭先生のズラが風で飛んだときとそっくりだ。

ほら、普段は「くっだらねー」とか「そんなことして何が面白いの?」って受け流せることでも、無意味に大爆笑したくなることってあるではないか。アレです。

理屈はどうでもよくって、なぜか笑いたくなっちゃうという不思議な状況。おそらく「ここでは絶対に笑っちゃいけない」と考えているからこそ、その反動で無意識に笑いたくなるんだろう。そういうテーマのTV番組もあるしね。

——しかし、今ここで笑ったら最悪自分の首が飛ぶ。息を吸って、吐いて、息を吸って吸って吸って、ゆっくり吐いて……よし。

「どうした、面を上げよ。それとも、我に顔を見せることはできぬと申すか?」

